

書評 市川裕著『ユダヤ人とユダヤ教』（岩波新書、2019年）

堀川敏寛

本書は、著者市川裕氏の40年の学びをまとめたものである。そこには30年来著者が関わってきたイスラエルの発掘調査の中で2016年夏ガリラヤ遺跡で発見された紀元1世紀のシナゴグ跡の成果も含まれている。著者は1980年代に自らが現代ヘブライ語を習っていた東京在住のイスラエル人の言葉「日本の繁栄は決して長続きしない」から、異教の地で生きることを余儀なくされてきたユダヤの人びとは、居住している社会の様子を適確に観察し、身に降りかかる災難に備えてきたことを実感した。そこから「ユダヤの人びとは自らの弱さを自覚したことで強くなった。厳しい境遇をしたたかに、そしてたくましく生き延びてきた彼らの姿に、私たちの未来を考える際のヒントを見いだせるかもしれない」（ii頁）と、ユダヤ人の生から現代の私たちにも通じるヒントを提供してくれる可能性を願い、著者は本書の執筆に取り組んだのである。

本書は序章「ユダヤ人とは誰か」に続いて、4つの章「歴史／信仰／学問／社会」から構成され、これら4つの側面からユダヤ人の生とユダヤ教について総合的に論じられている。序章では、先ずユダヤ人の定義から始まる。「ユダヤ人」という呼称はヘブライ語でイエフディといい、それはソロモン神殿時代の後半から第二神殿時代にかけてのユダ族の人びと、あるいはユダの地の住民として、聖書に登場するものである。中世以降はユダヤ啓示法（ハラハー）にもとづき、「ユダヤ人の母親から生まれた子、もしくはユダヤ教への改宗者として明確に定義された（5頁）。現代のイスラエル国家では、1950年に制定されたイスラエル帰還法があり、移住希望者がユダヤ人と認定されれば入国と同時に市民権が付与されるよう定められている。当時のベン・グリオン首相は正統派ユダヤ教徒と協定を結び、市民権付与の基準を定めた。それによれば真正なユダヤ人とはユダヤ啓示法が守られる社会に生まれ育った人びとであり、著者によって別の言い方をするならば「ユダヤ人とは、ラビの権威に服従し、タルムード（ユダヤ教の聖典のひとつ）の教えのもとに生きる人びと」である（6頁）。したがってたとえ本人が自分はユダヤ人であると自覚していてもイスラエルの基準に適うとは限らない。例として著者はイスラエル当局の目に留まった、建国以前から1980年代にかけて断続的に移住してきたエチオピア出身の集団を挙げる。彼らにはラビがおらずタルムー

下の教えも実行されていないため、マムゼルと呼ばれる啓示法に反した婚姻で生まれた子が存在するのではないかと疑われた。正統派ユダヤ教（ラビ宗教庁）は彼らに改宗儀礼にならった浸礼（トゥヴィラー）を課したが、この措置に対して批判が集まり政治問題化したため、最終的にイスラエル政府は彼らに帰還法を適用した。それゆえ現在イスラエルには 10 万人を超えるエチオピア系移民が暮らしているが、婚姻時の浸礼が義務とされている（7-8 頁）。離散ユダヤ人社会の婚姻関係に正統派ユダヤ教の権威が介入することはないが、イスラエルで市民権を取得するためには、彼らから審査を受けることになるのである。

第 1 章「歴史から見る」では第 1 節「古代のユダヤ人」で、著者からユダヤ史に対する誤った先入観念を捨てる必要性が提案される。それは「古代のユダヤ人たちは、バビロン捕囚後に、自分たちだけが救われるという選民思想を抱き、閉鎖的で自己中心的な宗教としてユダヤ教を誕生させた。その後、500 年を経過する中で、排他的で形式的な律法中心主義となった。その時、ナザレのイエスが出現して悔い改めと隣人愛を説き、世界宗教としてのキリスト教が誕生し、ユダヤ教は歴史の表舞台から消え去った」（10 頁）という西欧のキリスト教中心史観にもとづく世界史認識である。ユダヤ社会でラビが出現したのは、紀元後にローマ帝国との 2 度にわたる戦争によって壊滅的打撃を受けた時期からである。ラビは聖職者ではなく、神の教えに関して専門知識をもつ律法学者であり、祖国を失ったユダヤの人びとに新たな生き方を指し示す賢者であった。ラビは自分たちの置かれた現状を預言者アモスの言葉（8:11-12）に重ねて理解し、神の言葉に対する飢えと渇きから、先人の教えを集め、学習を深め、今日に至るまでユダヤ社会を指導する身分にある。著者が不思議に感じるのは、こうした賢者輩出の時代がローマ法の古典期とほぼ一致する点である（12 頁）。カラカラ帝時代に帝国内の自由人にローマ市民権法が付与されるが、同時期に、ユダヤ固有の法ミシュナが成立する。パレスティナとバビロニアでミシュナを普及させ、欽定編纂に尽力したラビたちはタンナイーム（繰り返す人びと、ミシュナを教えた人びと）と呼ばれ、成立後はミシュナを伝え教える役割のラビをアモライーム（説明する人）と呼ぶようになる。これ以後、ユダヤ教は明確な宗教法体系をもち、ユダヤ人社会は改宗制度を備えた自治共同体として再構築され、パレスティナとバビロニアを中心に展開する。この時期、西のローマ皇帝ではキリスト教が国教化され、東のササン朝ペルシアではゾロアスター教が強化される。やがてユダヤ人に対して自治制度が廃止され抑圧が強まったため、パレスティナでは 400 年頃に、バビロニアでは 500 年頃にタルムードが編纂され、共同体結束の礎とされた。特にバビロニア・タルムードは、パレスティナの学問を取り入れて独自の編集方法によって、二つの学塾（イエシヴァ）で、より完成度の高い啓示法の集成としてまとめ上げられ

た。ササン朝を滅ぼしたイスラム勢力がこの伝承を継承したため、ユダヤ教に始まる啓示法が中東から北アフリカ、スペインまで拡大し、中世ユダヤ人の存続と繁栄に大きく寄与することになる（15頁）。第2節「イスラム世界からヨーロッパへ」で著者は、イスラム世界の出現をもって中世は始まると本書で規定し、それはバビロニアを中心に学問の隆盛と交易での活躍が際立つ時期である、と評価する。イスラム世界ではアラビア語による法学が学問の中心であったことが、ユダヤ人の法学を一層発展させる契機となる。それがアッバス朝時代に発展したイエシヴァ（スーラとブンペディータ）や、後ウマイヤ朝時代のスペインでの法学を筆頭とした哲学・科学・医学・言語学の発展である。この時期のユダヤ知識人は学問の公用語であるアラビア語を日常言語として使い、イスラムの新たな学問を身につけ、ユダヤの伝統を墨守するだけの学問を批判した。イスラム哲学や医学を修得すべきだと見立てたモーゼス・マイモニデス、聖書註解で名高いアブラハム・イブン・エズラ、『クザリ』執筆で有名な詩人イエフダ・ハレヴィが代表的人物であり、彼らと同時期にイブン・ルシェド、朱子、道元、トマス・アキナスらが輩出され、この時期の世界的な学問の隆興を実感させる（17頁）。イスラム世界においてもユダヤ人は蔑視の対象だったが、啓典の民としてズィンミーという庇護民の身分を得て、イスラム教を尊重し、人頭税・土地税を納めさえすればウンマ（宗教共同体）を形成し、生命財産の保護、移動や商取引の自由を享受することができた。著者によれば、これは通商の民であるユダヤ人には格別の条件であり、商業と婚姻のつながりを通じたユダヤ社会の広域ネットワークが充実していった。こうしたユダヤ社会の繁栄を証拠立てるのが、19世紀末カイロのシナゴグ廃書蔵（ゲニザ）から発見された大量の宗教文書・経済文書である（21頁）。スペインではユダヤ史でも稀な黄金時代を迎え、9世紀から10世紀にはアルプスを越えてシュパイヤー、ヴォルムス、マインツでユダヤ人街が発達した（25頁）。ただしキリスト教徒のレコンキスタによって1492年スファラディ系ユダヤ人は追放されたため、彼らはオスマン帝国勢力下のバルカン地方に安住し、医師・交易商・金融業者として才を発揮した。この時期、パレスティナのサファド（現在のツファット）にスペインを追放された律法学者や神秘家が集い、カバラー（ユダヤ神秘主義）研究の拠点が形成される。また都市国家ヴェネチアは、統治手段として実利的に宗教を受け入れたためユダヤ人の避難地となった。ここで1516年に世界で初めて、居住区を物理的に一箇所に集中隔離したユダヤ人ゲットーが造られた（27-30頁）。一方アシュケナジ系ユダヤ人は、ペストの猛威も後押しして西欧キリスト教世界での暴動・虐殺が激化したため、居住と信仰の自由を認める1264年カリシュ憲章を制定したポーランドへと逃れていった。それはモンゴル侵攻によって多大な損害を被ったポーランド国王が、国の復興のためにドイツ方面

からの移民を奨励し、交易が得意で貨幣鑄造技術をもつユダヤ人に大きな期待を寄せていたからである（33頁）。著者によればユダヤ人の移住と世界帝国の興亡の歴史は対応しており、バビロニア帝国、アッバス朝、スペイン、オスマン帝国、オランダ、そして現代アメリカの繁栄は、ユダヤ人が安住し活躍した時期である（48-49頁）。21世紀の今日、ユダヤ人は近代以前のような流浪の民ではなく、選ばれた民でもなければ、蔑まれた民でもない。本章の最後に著者は「いまはユダヤ教には多様な宗派が存在する」（50頁）と述べ、ユダヤ人という前提自体、もはや選択肢の一つとなったのが現代であると主張する。また改宗制度によって非ユダヤ人にもユダヤ人となる道が許されており、この選択肢は未来に開かれているのである。

第2章「信仰から見る」ではユダヤ教の儀礼に関して詳述されている。第1節「ラビ・ユダヤ教」では、ユダヤ教は宗教なのかという提題から始まり、英語の religion が意味する宗教は、一般にキリスト教を基準に、信仰対象としての唯一神、世界観を含めた教義体系、礼拝行為を定めた儀礼体系、明確な信徒集団などの要素を備えたものを指しており、ユダヤ教は日本の神道と同様、その定義とうまく適合しない（54頁）。まずヘブライ語の語彙には宗教に該当する言葉がなく、現在は便宜的にダトという語が充てられているが、これは元来古代インドのダルマに匹敵する「法制度や法秩序」を意味し、この語が使われていたのはバビロン捕囚期に遡る（55頁）。その後ギリシア文化と出合ったユダヤ人は、自分たち独自の精神文化を総称するため、70人訳聖書『第2マカバイ記』で使われるギリシア語のユダイスモスという概念を考案したのだが、現代の私たちはこれをユダヤ教と呼んでいるのである（56頁）。著者は、キリスト教世界で言及されるヘブライズムは、モーセの律法が与えられる以前のアブラハムに遡る一神教信仰を指す概念であり、それが預言者を通じてキリスト教に展開したと想定されていることから、ユダイズムと混同してはならないと警笛を鳴らす（57頁）。西暦70年の第2神殿崩壊を起点とするその後のユダイズムをラビ・ユダヤ教と呼ぶのが一般的であり、これは著者によれば「生き残ったユダイズム」である。これが成立した目安の1つが、西暦200年頃に編纂された口伝律法集ミシュナの存在であり、これは全6巻63篇からなる法規範の集成で、ラビ・ユダ・ハナスィという権威による欽定編纂書である。ミシュナには宗教的規範のみならず、家族法・刑事罰と法廷での裁判などの規定も並ぶ。特に土地や家屋に関する「生産要素」に関する法整備は、同時代のローマ帝国では世俗のローマ法が担っていたことと好対照である。ここから著者はミシュナをラビたち律法学者によって営まれる「持ち運びできる国家」と喩え、世界のどこにいてもミシュナさえあればユダヤ社会は維持できる（58-62頁）と言う。ミシュナは「繰り返し語られた教え」を意味し、口伝ト

ラーであるため法文は簡潔で記憶に適する様式になっている。これはモーセからヨシュア、長老、預言者、大集会の人びとを経て、ラビたちユダヤ賢者に継承されたと信じられ、法規範を扱うハラハーとそれ以外の神学・倫理・人物伝・聖書註解を扱うアガダーに分類された。成文律法などの聖書を註解する営みはミドラシュと呼ばれる。ラビたちは、ヘブライ語を民族の言語として選び取り、ヘレニズム時代のユダヤ社会で成立した旧約聖書外典を正典から外し、ユダヤ人がギリシア語文化から離脱して生きる道を選択した。フィロンやフラウィウス・ヨセフスのような個人名による著作を、ラビたちは皆無とっていいほど残していない。その理由は神の教えを学ぶことこそ最重要なる人間の営みとして、個人名を潔癖なまでに拒否したからである（64頁）。ユダヤ教には、神を信仰するだけに留まらない啓示法の支配する領域が存在するが、キリスト教世界のような世俗法の領域は存在しない。またトーラーには神の戒律が613個ある。それには当為命令「人体の骨肉数」248と、禁止命令「太陽年の年間日数」365とを足し合わせた説と、ゲマトリア（ユダヤの文数解読術）でトーラーの文字を数字にすると611になり、それに神が最初民に直接語り掛けた2つを足した説とがある（72-73頁）。

第3章「学問から見る」の第1・2節では、学塾イェシヴァ（座ることの意）で西暦200年頃からトーラーの学習を意味するタルムード（学び）・トーラーが栄えていったことが紹介される。バビロニア・タルムードは、ヘブライ文字表記の頁を偶数で数え、中央の柱にミシュナとゲマラ（ラビたちの議論と解釈の記録）、内側の欄にラシ（中世タルムード学者）の註解、外側の欄にトサフォート（追加の意でラシの孫の代の学者）の註解という構成である。16世紀のヴェネチアで初めてミシュナの全巻が印刷され、この体裁がその後のタルムード印刷の基準となる（94-99頁）。つまりタルムードとは口伝トーラーであるミシュナの註釈書である。口伝トーラーはシナイ山のモーセに遡ることができ、後代の弟子たちが師に尋ねるまったく新たな問いに対しても、あらかじめ神から答えを授かっている。したがってたとえどのような新たな発見であっても、それを最高権威であるモーセに基づかせるという方法論を採っている（107頁）。第3節「ユダヤ哲学」では、アッバス朝時代に、タルムード学だけではなくシリアのキリスト教徒によってアラビア語に翻訳されたギリシア哲学、論理学、言語学、天文学、医学などギリシアの学問が一世を風靡する中、アラビア語を日常言語としていたユダヤ人が、これらとユダヤ法学との総合によってユダヤ哲学を生み出したことが紹介される。イスラム期のユダヤ哲学は、サアディア・ガオンが依拠するカラーム哲学とマイモニデスが依拠するファルサファの系統がある。マイモニデスは、モーセ以来イスラエルの預言者たちが伝えラビたちに継承された教えを、誰もが理解できるように法典として体系化することを企てた。それが第2のトーラーという大胆な名称をも

つ全 14 巻の大著『ミシュネー・トーラー』（1178 年）である。彼によれば、全ての人間は神の教えを戒律によって実践することで、精神的・身体的完全性を達成する責務を負っており、戒律の目的と根拠は哲学的思索によって明らかになる（115 頁）。その哲学的思索を学んだことによって信仰に疑いが生じた知識人のために、マイモニデスは『迷える者の導き』（1185 年）と題する哲学書を執筆し、神の啓示の書を正しく理解し、神を正しく認識するために、上記のギリシア的な学問を学ぶ必要を論じた。このようなユダヤ哲学の営みはマイモニデスで頂点を迎え、その後は衰え、わずかに 14 世紀のハスダイ・クレスカスが活躍したのみである。哲学に代わって創造論や悪の存在などの形而上学的思索を担ったのはカバラ（ユダヤ神秘主義）であった。ちなみに哲学はアラビア語、カバラはヘブライ語とアラム語によって深められた（117 頁）。第 4 節「ユダヤ精神の探究」では、今日のユダヤ教の礎は、ユダヤ啓蒙主義とハシディズムの新思潮が勢いを増す中、近代化が遅れ伝統に埋没していた 19 世紀のリトアニアの地で、正統派ユダヤ教が伝統の学問を根底から改革しタルムード学の刷新を起こしたことによって築かれたことが記される。その立役者がヴィルナ（現在のヴィリニウス）のガオンことラビ・エリヤ・ベン・シュロモーと弟子のラビ・ハイムである。ラビ・エリヤはタルムードのテキストそのものに深く沈潜し、そこから新たな意味を引き出すことを目指したが、それはマイモニデス以降に発達した律法典の法解釈があまりにも精緻を極めたため、その権威やそこでの議論に振り回されることなく、タルムードに戻れという意図ゆえである（122 頁）。

第 4 章「社会から見る」では、第 1 節「ユダヤ人の経済活動」で、ユダヤ人は初めからフェニキア人やアラブ人のように商才に長けていたわけではなかったが、商業と金融の分野で処世術を身につけていった経緯が語られる（134-144 頁）。第 2 節「ユダヤ人の人生の目標」では、社会の底辺でよそ者として不安に暮らしてきた彼らに、人生の目標と生きる勇気を与えてきたラビ・ユダヤ教の教えが紹介される。その例を挙げると、まずラビたちは、人類は全てノアの子孫であるため、シナイ山以前の全人類と結ばれた契約には「ノアの 7 戒」があると考えた。つぎにミシュネー・トーラー第 10 書種子の書で整理されている「施しの 8 段階」では、無利子の貸し付けなど貧者への配慮と 8 種類の喜捨が書かれている（145-149 頁）。第 3 節「近代メシア論」では近代に起こった 2 つのメシア論、世界市民主義に理想を見出しユダヤ人に市民権を付与する普遍主義的メシア論と、ユダヤ人国家イスラエルの建設をもたらした民族主義の流れをもつ個別主義的メシア論が紹介される。2018 年時点で世界のユダヤ人の半数にあたる約 650 万人がイスラエルに、残り半数の 8 割近くが北米に居住していることから、世界市民派と民族主義派の割合はほぼ半々という状況にある（150 頁）。前者の立場は、ユダヤ人が

祖国をもたずに世界市民として人類全体の繁栄に貢献する使命を担うと考える。まさにそれは、ユダヤ人が正義と慈愛で人びとを導く模範であるよう説く聖書の預言者の理念である。後者はシオニズムを掲げ、地上の一定の土地にヘブライ語という共通言語、防衛力、経済的に自立した国民国家建設という理念の実現を目指して、どの民族にも与えられている自然権を得ようと試みる立場である（154頁）。第4節「ユダヤ社会の実現」では、それまでの離散ユダヤ社会で聖なる言語としてトーラーと礼拝のためだけに使われてきたヘブライ語が、現代になって日常言語として復活した議論（160-162頁）、ユダヤ人と非ユダヤ人による混合婚を巡る議論、宗派が多様化してユダヤ性の定義が困難になってきたアメリカのユダヤ社会、世俗派と超正統派によって社会が分断されているイスラエル社会の現実（165-169頁）が論じられている。

著者は本書を書き終え、自身のユダヤ人論とユダヤ教論が初めて生まれたという感慨が沸いたようである。評者の同僚たちが「本書を読んでいる人を電車内でよく見かける」と話していたように本書は市井でよく読まれている実感がある。本書は主題であるユダヤ人とユダヤ教に対して、基礎的な情報を網羅している最良の概説書である。それは著者が、新書だからこそできた「思い切った単純化や概念化」を試みた（187頁）ことも影響していよう。同時に、ユダヤ学の専門研究に従事する者にとっても、知らなかったこと、うすうす気づいていたが分からなかったこと、今まで曖昧に理解していたことが、本書を通して明解になることが多々あるだろう。そういった意味でも本書は、ユダヤというテーマに少しでも関心のある読者に対して、期待を裏切らない学びを提供してくれるに違いない。